

奥の視点による“看取りの場所”の建築論(1)*

—『讃岐典侍日記』(上巻)に関する一考察—

川本 豊^{*1}, 市川 秀和^{*2}

Topo-logical Study of “Oku” on the Place of Deathbed in the classical literature (1), in case of the “Sanuki no Suke Nikki vol.1”

Yutaka KAWAMOTO^{*1} and Hidekazu ICHIKAWA

^{*1} FUT. Graduate School, Faculty of Engineering

The purpose of this study is to examine the some problems about the theory of architecture, according to the phenomena of dwelling in the Japanese classical literature. In this article, “Sanuki no Suke Nikki (diary) vol.1” as a text, written by the court lady Fujiwara no Nagako soon after the death of the Emperor Horikawa in 1107, we try to explore the mentality of the Dwelling from the point of view of “Oku” mentality. “Oku” is usually used to mean the back or inside, as depth in Space, but this word includes also the concept of Time from ancient times. Therefore, four elements---Space, Time, Body and Mind---are synthesized in this paper. Nagako described in small details to be present and so close at the death of an emperor in the palace. From these descriptions, we would like to shed light on the adaptability of Space in the Japanese dwelling by “Oku”.

Key Words: 奥, 看取り, 場所, 仕切り, 建築論, 讃岐典侍日記

1. はじめに

「住まい」を対象とした研究分野としては、中心的な位置にあるのが工学系の「建築学(住居史・住宅計画等)」であり、そのほか人文学系では「家政学」や「地理学」、あるいは「民俗学」や「文化人類学」といった分野からも注目されており、まさしく「住まい」とは、工学系と人文学系をつなぐ双方向からのアプローチが可能なテーマである。従って、これから「住まい」をテーマとするにおいて、車の両輪のように、工学系の建築学的なアプローチとともに、人文学系にある思想的なアプローチも、もう一方では必要なのではないだろうか。

また現代日本の超高齢社会において「住まい」を問題とすると、高齢者の「終の住まい」として住み慣れた自宅のほか、特別養護老人ホームやグループホームなどが注目される⁽¹⁾。そして近年の「病院死」から「在宅死」への移行を考え合せるならば、これからの「終の住まい」の課題とは、死に逝く者と家族との最後の場所、すなわち「生」と「死」が交叉する「看取りの場所」ではないだろうか。この「看取りの場所」の考察においてこそ、住まいをめぐる工学系(建築学)と人文学系のアプローチがひととき強く求められると考える。

そこで「看取りの場所」をめぐる本稿での考察方法は、わが国の古典文学テキストの中から、「天皇の死」という特殊な「看取り」が記録されたことで有名な平安時代末期の『讃岐典侍日記』(上巻)を建築論的に読解することである。さらに言葉という記述表現から読み取れる生活行為の深層レベルの心性を抽出し、そのフィルターを通して、もう一方の表層レベルの(物理的)形態を再照射することによって、「住まい」の持つ日常と非日常、あるいは生と死の精神史(心性史を含む)を再浮上させることができるのではないかと考えている。そして、こう

* 原稿受付 2020年5月29日

^{*1} 大学院工学研究科博士後期課程 社会システム学専攻・建築学コース

^{*2} 工学部・建築土木工学科 教授
E-mail: yutaka-kaw5@nifty.com

した考察視点を本稿で遂行していくに当たり、「奥」をキーワードに着目したい。なお「奥」という言葉は、古代から現代に至るまで、消え去ることなく生活用語として生きていることは疑いなく、しかも現在の日常会話の中で多様な意味（日常性・非日常性）で使われているということは、この生きた言葉の解釈から過去の世界へと遡る考察の糸口が見出されることでもあろう。

従って、かかる「奥」から見た、生と死が交叉する「看取りの場所」とは、如何なる独自の様相を開くのかを究明するために、以下の本論では、平安末期の古典文学テキストが詳細に読解されることになる。そこで考察を進める上で重要な「奥」の概念をまずは整理することから始めたい。

2. 「奥」の概念 と「看取りの場所」

2.1 「奥」の語源について

まず「奥」の語源について概観しておく。『角川新字源』⁽²⁾によると、旧字体の「奥」は、宀（室）に采（たいまつ）を卩（両手）でもった状態を示すといわれ、暗い室内を意味している。一方『角川古語大辞典』によると、「奥」は「空間的または時間的に遠く、現に感知できない所をいう」とする。白川静も「時間的には晩いこと、遠い将来のことを意味する」とし、さらに神聖の意も認める。

この「奥」という語は、欧英語に翻訳し難い語⁽³⁾の一つとされている。その理由として上記のように日本語においては時間・空間という両義を含んでいるが、欧英語では基本的に空間的な意味合いが強いことが考えられる。つまり、わが国では古来より、「奥」が時間的な意味にも使用されていることが特徴の一つとして考えられる。

こうした「奥」の語源からうかがえる、その独自の視座は、日常の空間・時間性を超越し、生と死が交叉して現象する「看取りの場所」を考察する上で有効であろうことが期待される。

2.2 「奥」に関する従来の見解について

次に本稿に関連し示唆を与えらると思われる、代表的な先行研究をあげる。

まず建築学の立場から、榎文彦が大都市東京における「空間のひだ」から説き起こし、その重層性は表と裏という概念では説明しきれないと述べ、そこに〈奥〉という概念⁽⁴⁾を提示した。それは奥行きであり、見えざる中心（原点）であり、無数に存在するともいう。ヨーロッパの〈中心—区画〉に対して〈奥—包む〉はきわだった日本的な対概念とするのである。これは「奥」研究の嚆矢と思われるが、その視点は東京の分析であり、都市に向けられたアーバン・デザイン論と位置付けられよう。この流れは当時の榎研究室の継承者によって変貌しながら現在まで続いており、たとえば藤田盟児はハイデッガーを引用してあらためて「奥」の時間性にふれ、「奥」は「今＝ここ」ではないどこか、いいかえれば現存在から解き放たれた異次元の時空に存在する場のことであったと考えられる。⁽⁵⁾と述べている。

また多田道太郎を中心とするグループが民俗学的な視点から「奥」について考察を行なっている。その中で多田は沖縄の祭祀空間のフィールドワークから、「御獄でならば死と和解できそうだ」⁽⁶⁾と感覚的にはあるが示唆に富んだ見解を示す。これは増田友也の建築論考⁽⁷⁾を想起させる。御獄（うたき）では奥は窪みでしかないが、そこに死への誘いが隠されていることに多田は気付くのである。「奥」が聖と俗をつなぐものとして位置づけられている。ケ→ケガレ→ハレという、死から生への転化の契機としての籠もりである。あるいは、建築学の分野から同グループに参画していた中岡義介は別稿において、「奥座敷は奥にない —無限の奥」⁽⁸⁾として「奥」の定まらぬ位置という点を指摘し、その場所概念の特徴的性格を明快に述べている。

次いで、秋山喜代子は“中世の「表」と「奥」”⁽⁹⁾において「表」に「裏」ではなく「奥」という語を対応させ、その構造を考察している。歴史学の立場での論考であり表層の平面図的な位置関係や史実に沿いながらの作業であるが、そこでも「奥」における、心情的な部分から発せられる主従の関係性などが興味深く述べられている。

藤原成一は文化史の立場から、榎・多田両氏の論に依りながら、奥の思想の根拠として神信仰を位置づけ、また「イエにおいても奥は集落の中の奥の構造や都市における奥のあり方と相似形である」⁽¹⁰⁾と述べる。この相似形の形成ということは、社会階層の厳格な西欧に対比する時、身分性がありながらもそこに緩く存在する観念として、日本文化の特徴の一つであり、重要な指摘である。それ故に、宮廷生活という特殊な場所の記述でありながら、本論考も一般論として広く敷衍できることになるのである。

また近年では、安原盛彦の一連の研究があげられよう。『源氏物語』などの古典文学をテキストにとりあげ、その空間読解を行っている。安原は「奥」という概念について、「その「奥」という言葉には志向性、主体の意識の方向が伴われる。そこでは観察者（主体）の視点（視覚だけをいうのではない）、観点、見方があらわれる。また「奥」には切り（限り）がないこと、無限であることが隠喩として伴われている。」⁽¹¹⁾と述べ「奥」にベクトルを認めており、その方法論も含めて本稿の立場と一部共通する方向性がみられる。

しかしこのように先行研究を概観してみると、「奥」という場所について、多田のみはそこに「死」そのものを観取しているが、そこに至るまでのプロセスとして「看取り」との関わりについては触れられていないことに気付く。従って本稿ではこれまで見落とされてきた「看取りの場所」としての「奥」についての論及を試みる。

2.3 「奥」の概念図式について

以上のように「奥」について、その語源・語義⁽¹²⁾と先行研究の特色をあげた。ここからも「奥」がもつ、漠然としたある種の深さが確認できる。つまり「奥」は三次元的パースペクティブを保持していることもうかがえ、その他の類似語をこえて、日本文化の特質を示す語の一つといえる。先行研究の視点では、空間性に隠れてこれまで見落されがちであった、「奥」のもつ時間性にも着目し、時間・空間の综合体として外在要因と位置づけ、感受する側の内在要因である身・心を含め、4つの要素の組合せとして「奥」をとらえたい。作業仮説の関係概念を Fig.1 に示す。「奥」に流れる通奏低音としてこの4要素を設定したものである。また Table1 は、この概念図に基づく4要素の単純な組合せ例を示したものである。以上の前提のもとに、テキスト本文に沿って、Fig.1・Table1の組合せを念頭におきつつ、天皇の死という時々刻々変化する事態に伴う、「看取りの場所」について検証を行う。

Table1 「奥」にみる「空／空間」「時／時間」構造

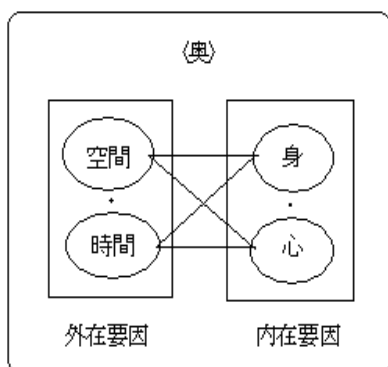


Fig.1 「奥」の概念図式

① 空・時 — 身・心	
② 空 — 身	⑥ 空・時 — 身
③ 空 — 心	⑦ 空・時 — 心
④ 時 — 身	⑧ 空 — 身・心
⑤ 時 — 心	⑨ 時 — 身・心

3. 『讃岐典侍日記』 と 作者について

3.1 テキストについて

『讃岐典侍日記』（以下『日記』と略称）とは、平安後期の第73代堀河天皇に「典侍」として仕えた藤原顕綱女藤原長子の日記である。父顕綱が讃岐守であったため、「讃岐典侍」と呼ばれた。

このテキストの中心人物である堀河天皇は、白河天皇の第二皇子として承暦3年（1079）に生誕し、応徳3年（1086）に立太子となるも、即日譲位し、わずか8歳で即位したが、上皇の後見が必至であったことから、以後の院政のさきがけとなった。成長して後は、朝政に取り組む意欲も一時見せたが、白河上皇の院政の強化とともに徐々に力を失い、後年は和歌や笛などの文化的な営みに傾斜していった。なお『続古事談』には「堀川^(ママ)院は、末代の賢王也」⁽¹³⁾として逸話が多く記されている。しかし病弱であったとされ、嘉承2年（1107）7月、29歳で譲位も間に合わず、崩御する。第一皇子が第74代鳥羽天皇として即位したが5歳の幼帝であり、祖父白河上皇の院政はさらに本格的に継続されることとなるが、これは別稿（下巻の考察）で詳しくふれる。

『日記』は上下巻より成り、上巻が、堀河天皇の嘉承2年（1107）6月20日の発病から7月19日の崩御に

至るまでの「崩御看取りの記」を扱っており、下巻が、鳥羽幼帝への再出仕のなか、やはり故院への「追慕の記」とされるが、崩御から即位という天皇の代替わりにあたる過渡期の側面⁽¹⁴⁾をも描きだすことになっている点でも興味深いものがある。小西甚一は、「繁瑣な宮中の儀式を平面的に書き写したのみで、ほとんど文藝精神の閃きが認められない」⁽¹⁵⁾と厳しく指摘するが、その一面、12世紀末葉の人たちに好評だったとも述べている。また、宮崎荘平は、「一見、宮廷日記とみえる枠組みのなかに、自己の悲哀・悲嘆の情を横溢させる結果となったところに、変種と称すべきゆえんがある」⁽¹⁶⁾と論及し、変種ゆえに作者固有の悲嘆の情を表出する女流日記文学になり得ているとする。しかし結局、このテキストは、文学的立場からは二級作品⁽¹⁷⁾と位置づけられ、これは現存する写本の問題で読解し難い部分や文脈の不明な部分があることに起因する一面があるものの、それでもテキストの本文を精緻に読解するならば、やはりその評価は概して低いものであると言わなければならない。

この先行研究の嚆矢である、池田亀鑑による研究⁽¹⁸⁾の一部を引用しておく。（（ ）内補足および傍線は引用者）

彼女は（作者藤原長子）、現世における帝王（堀河天皇）という絶対の大威力と、幽冥界における大いなる大意志とが「死」の刹那において相戦ういたましき相を凝視した。彼女は、人間の生命の貴重なる刹那において、大いなる「生」を味得し、大いなる「死」の前にひれふし、生きんともがき叫ぶ人間のはかなさを体験した。彼女は「死」を発見した人であり、同時に「生」を凝視した人でもある。（p.191）

昭和2年の研究ではあるが、いまだその有効性を失っていないと考える。以後、先学の諸研究がなされてきたが、再びこの出発点に立ち返り、長子の心から溢れ出た文章の精緻な読解を試みたい。

さて文学史的には、女房日記文学として一括されるのが通説であろうが、『紫式部日記』『枕草子』などは中宮付き「宮の女房」の日記、『讃岐典侍日記』や中世の『弁内侍日記』『中務内侍日記』などは天皇付き「内の女房」の日記⁽¹⁹⁾と細分される。しかし史実という史料的な側面からは、はるかに有効とされる『中右記』『殿暦』⁽²⁰⁾などは公家の日記であるだけに「表（外）→奥（内）」への視点での記述であるのに対して、これらの女房日記は「奥（内）→表（外）」あるいは「奥（内）→奥（内）」という特別な視点を持っており、奥に軸足を置いた内々での私的な営みを観察できることになろう。また、さきに天皇の代替わりの記であるとも述べたが、さらに中古と中世の境界に位置する院政期唯一の貴重な女房日記であることにも留意しておきたい。

なお、テキスト本文の引用は、神宮文庫蔵村井敬義奉納本を底本とする、石井文夫校注・訳『讃岐典侍日記』新編日本古典文学全集26（1994年、小学館）による。（以下、『小学館版』と略称。段落番号・頁数も『小学館版』によっている。下線は引用者、以下同じ）

また、次の諸書を適宜参照し、引用書である『小学館版』と比較しつつ読解を進めることとする。

玉井幸助 『讃岐典侍日記全註解』（1969年、有精堂。以下『玉井版』と略称）

森本元子 『讃岐典侍日記』（1977年、講談社学術文庫。以下『森本版』と略称）

小谷野純一 『讃岐典侍日記全評釈』（1988年、風間書房。以下『小谷野版』と略称）

岩佐美代子 『讃岐典侍日記全注釈』（2012年、笠間書院。以下『岩佐版』と略称）

3.2 作者の「典侍」について

次いで作者藤原長子の身分である「典侍」という官職について概観しておく。

典侍は、令制下、内侍司の職員として、長官である尚侍の下で次官級としてあり、掌侍がその下の三等官として組織されていた。しかし、時代とともにその役割は変質し、尚侍の後妃化により女官組織から離れ、結果、典侍が繰り上がって責任者の位置に付くことになるが、その典侍もやがて、乳母の立場に近似してくる。『日記』の作者の讃岐典侍藤原長子は乳母ではない。女官としての典侍であり、任官は康和3年（1101）である。発病当時の状況について、本文によると乳母二人と典侍一人で死の床に伏せる天皇を看病することになる。ただ、二人の乳母は身分制度の歴然とした内裏ではあきらかに高位であり、また年長でもあり、典侍でしかない長子は、それなりの自制を余儀なくされたことは明らかであり、乳母たちの指図の下で動いている場面も見受けられる。

ではその典侍の職務とは何であろうか。公的な職務として、即位・譲位に御剣璽などを捧持することであり、『日記』上巻も代替わりによるその場面の描写で閉じられている。また、褰帳命婦、賀茂祭使、八十島祭使などもその重要な職務である。さらに、内宴の陪膳に伺候し、斎宮群行や東宮対面などでも、中心の官女として役目を果たしているとの研究報告⁽²¹⁾がある。これを「表」向きの職務とすれば、その対として「奥」向きの職務が考

えられる。典侍は天皇の最も近くに侍しその日常に直接手を下して奉仕する。ちなみに近代の事例が岩佐美代子の体験をふまえた報告によって知られる。すなわち、大正天皇の東宮御所から宮城への移居の際の「奥表ノ区分并御側御用奉仕の要綱」⁽²²⁾を提示して、洗面・湯上げ・召替・配膳・厠・居間の掃除など御身回りのお世話とともに、「侍寝」も高等女官の歴然とした公務であったとしている。天皇の職務としては、朝政とともに、やはり皇統の維持が重要な役務であり、責務であったことは否めないであろう。

ところで堀河天皇の後宮は、どうであったか。中宮は、白河院の同母妹篤子内親王であり、天皇には叔母にあたり、年齢差も相当（１９歳年長）あった。もう一人は女御藤原苺子（本文中に「東宮の母」とそっけなく記されている）であり、康和５年（１１０３）、宗仁親王（後の鳥羽帝）の出産が原因で入内後５年足らずで身罷る。しかし、堀河天皇の御子は、宗仁親王をはじめ６人とされる。そのうち３人までもが内侍司のいわゆる高級女官腹である。上皇の思惑により空洞化した後宮は、いきおい「侍寝」をも公務として仕える典侍たちを巻き込むことになる。逆な見方をすれば、典侍も御子を産む可能性があったということを示唆するものである。これら３人の御子のうち、２人の誕生時点には長子もすでに典侍に任官しており、また出仕していた従姉妹が御子を産んだという事実も当然知ったはずである。しかし『日記』にはこの事実と全く触れることなく、また自分を置いて他の典侍との関係を堀河天皇が持っていたことも著していないが、『日記』を読み解く上では看過できない事実であろう。

稲賀敬二が「『書かれていないものを読み取る』事は許されないであろうか」と問い、「『書かれたもの』と『書かれていないもの』の境界は、どこで一線を引かれるのであろうか」⁽²³⁾とも述べる。ここでは先行研究をふまえ、虚心に、書かれてある文章に、そしてその向う側にいる作者と向き合って対話をすることでその一線を往来できると考えている。語りきれていない「奥」、あるいは史実との齟齬が逆説的には日記そのものであり、「表」と「奥」のまなざしの往来である。以下において、これらのことを念頭に置きつつ、本文の読解に入る。

4. テクストの構成と「序文」—心のどかなる里居

『日記』は、序文と上巻、下巻の３つに大別される。まず「上巻」が崩御後余り時をおかずして書かれ、次いで鳥羽新帝に出仕後に「下巻」が書かれ、そのまとめとして「序文」が最後に書かれて一本として全体の体裁を整えたとするのが通説となっている。よって「序文」は書き始めの序ということではなく、上下巻通じての総序としての位置づけとして読まれなければならない。すべての行事を終え、心落ち着いた状況での執筆と思える技巧的な文章となっていることからそれがうかがえる。堀河帝には８年の春秋を仕えたとある。典侍の任官は康和３年（１１０１）であり、崩御が嘉承２年（１１０７）となるため、任官前から出仕していたことになる。思い出すことすべてが珠玉の色彩を帯び、四季の彩りとともに華麗な語句がならべられている。それをなさしめたのがほかならぬ「心のどかなる里居」なのである。自分の家という慣れ親しんだ場所をここでは「自分自身の奥」と規定しておきたい。

〔１〕五月の空もくもらはしく、田子の裳裾もほしわぶらんもことわりと見え、さらぬだにもものむつかしきころしも、心のどかなる里居に、常よりも昔今のこと思ひつづけられて、ものあはれなれば、（p.391）

なお小谷野純一による『日記』の記述と史実との齟齬⁽²⁴⁾について精緻な検証がある。上記の「序文」の書き出し「五月の空もくもらはしく」からはじまって、『中右記』・『殿暦』等の史実をできるだけ忠実に「家」の継承者に伝える目的で書かれた擬漢文体の公家日記との照合が行われている。たしかに当時の天候は悪くなかったようで日記としての記録性という役割は危うくなっているが、本稿では、本文の記述に沿ってその「奥」の視点から心性を読み取ろうとする立場をとるため、史実との齟齬については支障のない限り立ち入らないこととする。

それではテキスト『日記』上巻の読解を進めるに当たり、その考察手順を示しておきたい。まず上巻の内容を確認すると、堀河天皇の嘉承２年（１１０７）６月２０日の発病から７月１９日の崩御までのおよそ１ヶ月にわたる「崩御看取りの記」である。まず発病から病床の日々へ、そして容態が急変して死への準備から崩御へ、さらに最後の崩御をめぐる周囲の対応、という３段階で「看取りの場所」が現象する構造を詳細に考察する。

5. 看取りの場所の現象（１）—世をうらめしげに

5.1 天皇の発病 —など人々は目も見立てぬ

嘉承２年（１１０７）６月２０日、天皇は発病する。

〔２〕六月二十日のことぞかし、内は、例さまにもおぼしめされざれし御けしき、ともすればうち臥しがちにて、「これを人はなやむとはいふ。など人々は目も見立てぬ」とおほせられて、世をうらめしげにおぼしたりしものを、
(p.392)

これは、その際の言葉である。参考諸書ともにほぼ字面どおりの解釈がなされているが、『玉井版』は、「こういう時には思い切って世の務を捨てて保養をするのがよいのであるに、なぜ人々はこの取り計らいをしてくれぬのか」と踏み込んだ語釈をする。天皇が臥す「奥」という場所での会話ということを考慮すれば、慣れ親しんだ取り巻きの女性たちへの投げかけとして首肯できよう。つまり「内→内」の方向性である。次の「世をうらめしげに」という語で、そこから身の上という「内→内」とともに、世の中という「内→外」というまなざしも込められているように思われる。

次段の記述が、発病から崩御に至る一ヶ月の期間のうち前半月分がとび重篤になった7月6日から始まる。石埜敬子は、日記文学が、回想される過去と、回想する執筆現在という二重の時間構造を有する⁽²⁵⁾と指摘し、それを内面的に全体として統一するのは執筆時の作者の主観とされる。ここでもその主観がなさしめたといえよう。

〔５〕あな、いみじ、かくてはかなくならせたまひなんゆゆしきこそ、ありがたくつかうまつりよかりつる御心のめでたさ、など思ひつづけられて、目も心にかなふものなりければ、つゆも寝られず、まもりまゐらせて、ほどさへ堪へがたく暑きころにて、御障子と臥させたまへるとにつめられて、寄り添ひまゐらせて、寝入らせたまへる御顔をまもらへまゐらせて、泣くよりほかのことぞなき。いとかく何しになれつかうまつりけんと、くやしくおぼゆ。
(p.397)

この段落では、天皇の病床の間⁽²⁶⁾つまり「看取りの場所」が描かれる。言い換えれば「奥」という場所の平面図的記述となる。引用書（p.396）にも、その全体間取図が掲載されている。「狭いので」という言い訳を伴いながら、天皇の寝顔を見守るという直近に伺候する自負が、泣きながらにも表明されている。さらには、「くやしくおぼゆ」と、自分の力ではどうすることもできない歯がゆさからの激しい感情表現も発露される。天皇の看病という緊張感、心のはりつめた状況が伝わる。

〔６〕見まゐらすれば、御目弱げにて御覧じあはせて、「いかにかくは寝ぬぞ」とおほせらるれば、御覧じ知るなめりと思ふも、堪へがたくあはれにて、(p.398) （中略）
顔も見苦しからんと思へど、かくおどろかせたまへるをりにだに、もの参らせころみんとて、顔に手をまぎらはしながら、御枕がみに置きたる御かゆやひるなどを、もしやとくくめまゐらすれば、すこし召し、また大殿ごもりぬ。(p.399)

本段でも、看取りの場所における作者と天皇との親密な関係性が披瀝される。「御覧じあはせて」という部分の効果は大きく、寝ずに見守っていた長子と目を開けた天皇の視線が合わさったという描写である。作者は意識していなかったのかもしれないが、ここでも天皇との心の通い合いとして描写したのであろう。そこには長子のあゝ種の誇らしさもうかがえよう。しかし、次の下線部分は、看病疲れの顔を嫌ったとも受けとれ、習い性ともいふべきか、当時の女性としてのとっさのたしなみが現れたとも解せる。作者は天皇とほぼ同年代とされている。年の離れた乳母たちにとってはきつい看病であり、人手が足りないとはいえ、結局、若い長子の出番が多くならざるを得ないことが想像され、顔（面）が見苦しくなりながらもけなげな看病ぶりと解せよう。

5.2 病床の日々 — 鐘の音聞こゆ

次の第7段は、看取りの場所としての「奥」を考える上で示唆の多い段落であるといえる。3箇所、部分的に引用する。

〔７〕明けがたになりぬるに、鐘の音聞こゆ。明けなんとするにやと思ふに、いとうれしく。やうやう鳥の声など聞こゆ。朝ぎよめの音など聞くに、明けはてぬと聞こゆれば、よし、例の、人たちおどろきあはれなば、かはりてすこし寝入らん、と思ふに、御格子参り大殿油まかでなどすれば、やすまと思ひて単衣を引き被くを御覧じて、引き退かせたまへば、なほな寝そと思はせたまふなめりと思へば、起き上がりぬ。(p.399) （中略）
もの参らせころみんとてなり。大貳の三位、御うしろに抱きまゐらせて、「もの参らせよ」とあれば、小さき御盤にただつゆばかり、起き上がらせたまへるを見まゐらすれば、今日などは、いみじう苦しげによにならせたまひたと見ゆ。(p.400) （中略）

「大臣来」と、いみじう苦しげにおぼしめしながら告げさせたまふ、御心のありがたさは、いかでか思ひ知られざらん。かく、苦しげなる御心地にたゆまず告げさせたまふ御心の、あはれに思ひ知られて、涙浮くを、あやしげに御覧じて、はかばかしくも召さで、臥させたまひぬれば、また添い臥しまゐらせぬ。（p.401）

まず前段であるが、夜を徹して看病した後の夜明けである。「いとうれしく」とある。短いがこの言葉に尽きるであろう。では、夜が明けたことを作者が知ったのは、何によってなのか。日が昇って明るくなったからではない。ここは「奥」の場所であり、その構造から光が届くかはあやしい。つまりそれは「音」によってなのである。「鐘の音」⁽²⁷⁾が聞え、「鳥の声」が聞え、やがて「朝ぎよめの音」という外の日常の音が聞えてくる。

重い病の天皇を看守る「奥」なる場所における非日常の時間と、外に流れる日常の時間の落差を実感しつつ、繰り返される日常の始まりを感じ取ったその「うれしさ」である。これは「奥」から「外」へのまなざしの描写である。あるいは「非日常」から「日常」へのまなざしともいえる。そしてこれは偽りのない実景である。さらには中古にあつては「夜」と「昼」にも同様な二分法が可能であろう。「夜」は魑魅魍魎の跋扈する、あくまでも冥（くら）い世界である。帝とともに生きて新たな明るい朝を迎えることができた再生の悦びとして、ここでは「うれしさ」を読み取らなければならない。ひとまず安心した作者は疲れ果て少し休もうとする。しかし、わがままに甘える病者は単衣を引き退け、許さない。自分ではどうにもならない苛立ちを隠せない病者と、それにどこまでも従う作者なのである。当然、主従それも究極の主従という関係性はあるが、これも「奥」なる場所に伺候する従者としての自負であり、さらにはそれを越えた関係を持つ者相互の諒解とも理解できよう。

中段は、作者が一旦中座して再び病床に戻ってきた場面で、臨場感あふれる記述となっている。ここでは、天皇に対しても、看取りの場所である「奥」の三人は、直接的な玉体への接触を通した看護を行っていることに注目したい。前段は聴覚が働き、中段は皮膚感覚いわば触覚が働く。この視覚を外した表現にも留意しておく。

後段は「大臣来」という天皇の言葉である。関白忠実が氣遣って音も立てずに病床の間である「奥」に参上する。気持が帝に向っている作者はそれに気付かない。臥せている天皇は、たとえ忍んでいてもその密やかな足音や、衣に焚き染めた香の匂いなどにいち早く反応し、苦しい息の中からそれを知らせたのであろう。作者はその心遣いに涙する。ここで注意すべきは、「大臣来」ということによって、一時的にはあるが、「奥」が「表」に反転しなければならないことである。関白と天皇とがそれぞれの立場で対峙すればそれは「政」となる。たとえ重篤な病で動くことができないとはいえ、譲位をしていない現役の天皇である。とすれば、逆に公務の方が「奥」へとやって来る。「大臣来」とはまさしく「表来」である。さきほど「奥」の非日常性といったが、これは全体を相対化したときのことであり、「奥」なる場所の中でもやはり日常があり、「表」の侵入によって、それが破れることになる。ここでも、この空間の転回を察知する契機となったのが聴覚あるいは嗅覚であった。

6. 看取りの場所の現象（２）

6.1 死への準備 — 御膝の陰

次の第８段も、前段と同様に「大殿近く参る」である。

〔８〕かくおはしませば、殿も夜昼たゆまず参らせたまへば、いとどはれにはしたなき心地すれば、三位殿も、「をりにこそしたがへ。かばかりになりたることに、なんでふものはばかりはする」とあれば、いかがはせんとて過ぐす。

大殿近く参らせたまへば、御膝高くなして陰に隠させたまへば、われも単衣を引き被きて臥して聞けば、（p.401）

ここも再び、「奥」が反転して一時的に「表」とならざるを得ない。それを諒解している帝は、自らの御膝を高くして居残る作者を隠そうとするのである。これをどう理解するか。「奥」が「表」に反転したが、高くした帝の御膝から向こう側はふたたび「奥」となったと解せよう。つまり看取りの場所である「奥」のなかに、高くした帝の御膝を境界として、さらなる「表」と「奥」が表出されたのである。これはあるものがあるものの中に順々に納まっている「入れ子」に準ずるものがあり、ここでもわが国の文化的特色がうかがえる。その了解のもとに、関白は公務を行い、作者は単衣を被って知らぬふりをする。天皇のなした行為によって、すべてが暗黙に了解されたのであり、それによってその場に居合わせた関白以下、皆がその役割を果たし終えたのである。

そして、この帝の行為は、作者の心に深く刻まれたのであろう。下巻においても、関白忠実との回想として、２回も記述されている。私は天皇が認めた「奥」の人であると言わんばかりに繰り返される記述は、かえって「奥」

と「表」を行き来する典侍の危うい立場を表象することにもなっているのである。

〔１０〕大貳の三位、大臣殿の三位殿具して、夜の御殿に入りて、戸口に御几帳立てて、ほころびより見れば、（中略）御几帳のうちなる人、かやうにて一年のやうにやませたまへかし、いかばかりうれしからんと思ふ。（p.404）

第１０段は小康を得た天皇が群臣に氷を振舞う場面である。ここでも、さきほどの反転が生じることになり、伺候する３人は病床の間より位置的にはさらに奥の「夜の御殿」⁽²⁸⁾に移り、几帳を立てて外（ここでは「表」となった病床の間）をうかがっている。その自分たちを「御几帳のうちなる人」と表現して、この小康状態のままなんとか先年の病のように帝のご回復を、と願っているのである。ここでは「奥」が場所を移動したともいえ並列的な配置となる。これは「奥」のもつ柔軟性である。それを仕切るものとして、几帳が使われていることになる。

6.2 容態の急変 —など、さはおぼしめすぞ

しかし１７日になって容態が急変する。一時退出していた大貳三位が戻って、その急変ぶりに驚き伺候する３人が話しているのを聞きつけた帝の言葉がすでに「今は耳もはかばかしく聞えず」であった。

〔１２〕「今は耳もはかばかしく聞えず」とおほせられて、いとど弱げに見えさせたまふ。

しばしばかりありて、「このたびは、さるべきたびとおぼゆるぞ」とおほせらるれば、つつましかれど、「など、さはおぼしめすぞ」と申せば、「僧正のさしも頭より黒煙を立てて祈れど、そのしるしとおぼえて心地のやすまず、まさる心地のすれば」とおほせらるるを聞くは、何にかは似たる。（p.406）

しばらくして両者間で次のやりとりがある。「いよいよこの度ばかりは最期の時ように思われる」と、それに対して、「どうしてそのようにお思いになられるのか」と問い返すのである。ここでのやりとりは、まことに一人の病者と見守る看護者との素直な会話と受け取っていいのではないか。天皇のそれに対する返答も素直である。治療（祈祷）の効果が一向に現れないからだ。これはまさしく「奥」なる場所に居合わせたものだけが持つ心の通い合いとはいえないか。すでにここでは二人称的な関係性がうかがえる。廷臣たちはいかに心砕いてもやはり「奥」には入れず、三人称の位置のままなのである。あるいは、別な見方をすれば『往生要集』とそれに続く『二十五三昧起請』にみられる臨終行儀⁽²⁹⁾にも似たやりとりともいえようか。死に臨む帝に、「など、さはおぼしめすぞ」とその根拠を問うのである。すると天皇もそれに答える。なんとも哀しい往還である。もはや死への傾斜はとめられない。いかに献身的に看護を尽くしても、死の恐怖に苛まれるのは当事者天皇自身である。それを知り尽くした上で、看取りの場所における二人称「我—汝」間の呼びかけなのである。

6.3 臨終の場、崩御へ —われは死なんずるなりけり

死への準備として戒を受けた天皇はますます悪化の一途をたどり、苦しい中で、定海阿闍梨の法華經の読經に唱和される。そうこうするうちに、とうとう危篤状態に陥る。３人は最後の力をふりしぼって献身的に看護する。

〔１７〕例の氷など参らせ、「御汗などのごへ」とおほせらるれば、御枕がみなる陸奥紙して、御鬢のわたりなどのごひまゐらするほどに、「いみじく苦しくこそなるなれ。われは死なんずるなりけり」とおほせられて、（p.415）

（中略）大貳の三位、御うしろにみたまひたり。御背中を寄せかけまゐらせて、御手をとらへまゐらせなどする御腕、ひややかにさぐられさせたまふ。（p.416）

いよいよ苦しくなった帝は、なんとも凄まじい絶叫であろう「われは死なんずるなりけり」と言いつつ、「南無阿弥陀仏」を唱える。しかしその腕は、すでに冷たくなりつつあった。本文にあるように、すべて身体の接触から感じ取られたものであり、そのため臨場感あふれた表現となっている。しかし、相手は天皇である。その体に触れること自体がすでに選ばれたもののみが許される行為であり、そこにも「奥」なる場所の心性を認めることができ、またその故の自負も感じ取られるであろう。

〔１８〕日ごろへだつれど、何のもののおぼえんにかもののはづかしともおぼえん、ただひとつにまとはれて、僧正、三位殿二人、御前、わが身、五人の人々、ひとつにまとはれあひたり。（p.417）（中略）

御口のかぎりなん念仏申させたまへるも、はたらかせたまはずならせたまひぬ。（中略）

大臣殿寄りて、「今は何のかひなし」とて、御枕なほして、抱き臥させまゐらせつ。殿たち、みな立たせたまひぬ。

僧正、なほ御かたはらに添ひみたまひて、何のことに、しのびやかにつぶつぶと申し聞かせたまふ。（p.418）

さていよいよ危急のときである。「大神宮、助けさせたまへ」などとの叫びもむなしく、御目の様子が変わって

いく。普段は几帳などで隔てられていたが、もはや、まだ心的に余裕のみられた第6段で記述されたような恥ずかしさもかなぐり捨てて、帝・乳母2人・僧正・作者の5人が一塊になって一心に声高に念仏を唱える。しかしすべてはむなしく終る。ついに天皇の口が止まった、19日早暁である。この段は「奥」の視点からは、上巻のクライマックスといえる。長子にとっても忘れえぬ一瞬であろう。ここまでが「奥」である。

しかし関白が臨終を看取り、すぐさま「表」の表情へと戻り、内大臣が西に向いて端坐する帝の遺体を北枕に寝かせて退出する。僧正はなお傍らにいて、帝の耳に何ごとかを申し聞かせているのである。先ほどまでの頭から黒煙を出さんまでの声高に唱和する念仏から一転、「奥」であった看取りの場所に訪れた静寂である。

7. 看取りの場所の現象（３） —うときは呼びも入れず

ところが、一瞬の静寂をおいて再び、天皇を看取った「奥」の場所は騒然となる。

〔19〕御障子をなみなどのやうにかはかとは引き鳴らして、泣きあひたるおびたし、（中略）「いまひとたび見まゐらせん」とて、親しき上達部、殿上人も、われもわれもと参れど、うときは呼びも入れず。（p.419）

大式の三位、（中略）御手をとらへてをめきさげびたまふ聞かぞ、堪へがたき。（中略）

藤三位殿（中略）「あな、心憂や。（中略）かぎりのたびしもかく心地を病みてける身の宿世の、心憂きこと」といひつづけて、泣きたまふ。

われは、御汗をのごひまゐらせつる陸奥紙を顔に押しあててぞ、添いゐられたる。あの人たちの思ひまゐらせらんにも劣らず思ひまゐらすと、年ごろは思ひつれど、なほ劣りけるにや、あれらのやうに声たてられぬはとぞ、思ひ知るる。（p.421）

崩御を嘆き悲しむ人々の描写も凄まじい。しかしそこに誰でもが目通りできたわけではない。「うときは呼びも入れず」と、ぴしゃりと言い切っている。また別の箇所では、「いかでわが君のおはしますところに下衆をば寄せん。」ともいい、やはり「奥」なる場所が持つ特別な意味性を強調している。乳母たちは「子」をなくした悲しみから人目を憚らずに泣きわめく。それは作者すら立ち入ることのできない世界なのである。長子は、先ほどまで帝の汗をぬぐった陸奥紙を押し当ててじっと耐える。動と静の対比もさることながら、典侍の身で最期を看取った安堵と自負が作者をして動かさなかったようにも思える。多くの悲嘆にくれる人々のなかにいて、慟哭すらできない自分とは。このとき作者は、ほかでもないつらい「自分自身の奥」に再び身を置いていたのである。

〔21〕御腕をさぐれば、いまだ、冷えながら、例の人のやうにたをやかにさぐらるれば、もしやとこころみがてら、しばしも、さらば、たがへまゐらせて、もののたまへかしと思へば、いたくもすすめで、もろともに御腕をとらへてゐたれば、いつのほどに変はるにか、ただすくみにすくみはてさせたまひぬ。（p.424）（中略）

御乳母たち立たれぬれば、因幡の内侍とて、明け暮れ、あまたの内侍のなかに、とりわきつかうまつりつきたりし人と二人、御かたはらに無期に近くさぶらふ。（p.425）

典侍という役職上からか、作者はまだ冷静であった。もしやと思って、故院の腕をとらえていたが、やがて固くなってしまふ。現代的に言えば、長子は自らの手で天皇の死後硬直をも確認したのである。天皇の身体に直接触れることができる自分を再度しっかりと記憶に植え付けたともいえる行為である。

やがて悲嘆にくれた乳母たちは退出し、ふたたび戻ってきた静寂の中で、親しい女官と二人して、御遺骸の傍にいつまでも近侍するのである。いわば「自分たちの奥」に、束の間たゆたう流れる時間をいとおしむように。

そこは「無期に近くさぶらふ」という。生きて在る典侍たちと、死せる天皇とが限りなく近くあるという。しかしそれはまた限りなく大きな溝でもある。そこは、生（顕）と死（冥）とが、相互乗り入れし重なり合うグレーゾーンであり、もう一つの「奥」なる場所である。

しかし「奥」に伺候した人々の、過ぎ去った時間への哀しみにも関わらず、「表」では新しい事態（新帝即位）の準備が粛々と進行していくのである。つまり、天皇の象徴である神璽・宝剣が美濃の内侍によって皇太子のもとへと移され、主のいなくなった昼の御座の御帳を取りこぼつ音で、上巻は締めくくられる。

8. むすび

本稿は『讃岐典侍日記』⁽³⁰⁾（上巻）をテキストにして、天皇を看取った「奥」なる場所を、空間・時間（外在要因）／身・心（内在要因）という4要素の構成ととらえる視点から建築論的考察を行った。天皇の病床の間という

究極の「奥」ともいえる場所の多様な表出が、さまざまな角度から読み取ることができた。後宮という閉じられたサークルによって築かれた場所ではあるが、そこで営まれる活動・心情によって、「奥」なる場所は、融通無碍に転回しあるいは反転するといった柔軟な変化をするのである。これが「奥」の一樣態と考えられる。

通常、場所は、固定されてさほど変わることはなく、人の方から移動して目的に適合させることになる。しかし、その主である天皇は病氣である。よって人がその奥処にやってきて、場所が変貌することで対応することになる。この場所の転回が『日記』における「奥」なる場所の表象の一つと考えられる。大臣が来れば、院政期とはいえ現役の天皇の立場としては、「政」の場(表)とならざるを得ない。つまり「奥」と「表」の反転である。あるいは作者の心に深く残った「御膝のかげ」にみられるように、「奥」にさらなる「奥」と「表」の表出である。その仕切り⁽³¹⁾として、いわば几帳の代わりとなったのが、天皇が高く上げた膝なのである。この現象は「入れ子」の一樣態とも考えられる。几帳にしる、御ひざにしる、物理的には華奢な危うい仕切りであるが、それでも相互の諒解のもとに心性的には充分だったことが確認できた。これについては、篠塚純子が異なる観点⁽³²⁾から次のように的確に指摘している。「長子は気づいていただろうか。長子の生のもっとも充足した、堀河帝との私の世界が、内裏という公の舞台を得てはじめて存在したというパラドックスを。天皇の日常は同時に非日常であり、私は公に内包されてのみある。「御ひざのかげ」こそ長子の真に生きる場所であった。」(傍点引用者)と述べるように、やはりここである「入れ子構造」としてのパラドックスと考えられよう。本文から読み取れた「奥」と「表」を行き来する危うい位置に立つ長子を表徴するかのようなグレーゾーンとしての「御膝のかげ」という場所は、それゆえに下巻にも再び取り上げられることになるのである。以上は「奥」なる場所に表れる空間的側面の身・心である。『日記』上巻本文に沿ってみてきたように、詳述される発病当初の看病から最期の看死へとたどる看取りのプロセス、崩御後の周囲の対応という3段階で、場所が現象する構造、そしてそこで吐露される心情の変転が、まさしく「奥」なる場所での、時間的側面の身・心としてとらえられる。『日記』本文中には「奥」という言葉をほとんど見出すことはできないが、そのまなざしをテキストの文脈から読み解くことにより、分析概念として、時・空／身・心という4要素の立体交叉した、「奥」という看取りの場所の構造を究明したのである。

注

- (1) 「終の住まい」となる入所施設について、たとえば建築に関わる現代的な問題として次の論考がすでにある。
市川秀和(2005)「ユニットケアとターミナルケア」『福井工業大学研究紀要』第35号。
市川秀和(2008)「高齢期ターミナルケアにおける「住まうこと」—現代建築は「死」に向き合えるのか—」
『北陸宗教文化』第21号。
このサブタイトルにある、現代建築は「死に向き合えるのか」という厳しい問いかけは、「住まうこと」の本義としてあらためて考え続けていかねばならないであろう。
- (2) 『新字源 改訂版』角川書店。また、諸橋徹次『大漢和辞典』では「室の西南(東南)隅」とする。
白川静『字通』『字訓』平凡社では、「膳肉を神に薦める祀所」とし、「幽」と対転の語とする。
- (3) サイデンステッカーの英訳本『源氏物語』でも、「奥」は省かれたり意識されていたり、あるいは説明的な表現になることが多い。E.G.SEIDENSTICKER(1976)『The Tale of Genji』ALFRED A.KNOPF, NEW YORK.
- (4) 榎文彦(1980)「奥の思想」p.202 『見えがくれする都市』SD選書、鹿島出版会。
初出は「日本の都市空間と『奥』」と題して、『世界』岩波書店1978年12月号に掲載。
- (5) 藤田盟児(2009)「奥—時空間構造からの一考察」p.082,
『都市のあこがれ 東京大学榎文彦研究室のその後とこれから』鹿島出版会。
- (6) 多田道太郎(1983)「奥の感覚」p.426 上田・多田・中岡編『空間の原型』筑摩書房。
- (7) 増田友也(1978)『建築的空間の原始的構造』ナカニシヤ出版。
- (8) 中岡義介(1986)『奥座敷は奥にない—日本の住まいを解剖する』彰国社、p.188。
- (9) 秋山喜代子(1995)「中世の「表」と「奥」」五味文彦編『中世の空間を読む』吉川弘文館。
史学での論考であり視点も異なるが、「奥」という言葉も含めて、本稿にとって参考となる部分が多であった。
- (10) 藤原成一(2005)『癒しのイエ—日本文化の5つの原理』法蔵館、p.180。
- (11) 安原盛彦(2016)『日本建築空間史—中心と奥』鹿島出版会、p.287。

同書は通史として、古代から中世・近世への住空間の変化を、中心性から奥性への転換として捉え、ここでいう奥性は空洞化、中空化も内包するとしている。また『源氏物語空間読解』など、示唆に富む論考が多くある。

- (12) ここでの鍵語として、「奥」の語義を確認しておく。一般的には表裏としての「裏」、さらに「内」と「外」についても同義で使用されている場合が見受けられるので、補強のため追記する。（下線は引用者、以下同じ）

おく[奥] 『日本国語大辞典 第二版』小学館（以下、『日国』と略称）

空間的に、表・入り口から深くはいったほう。家屋の内部のほう。室のすみなど。

中古の家屋などでは、内部を漠然とさす。奥の間。家人、妻子などがいつもいるところ。

抽象的に、奥深いこと、内部、内面などをさすという。時間的に、現在から遠い先のこと。過去の意には用いない。

おく[奥] 『岩波古語辞典 改訂版』岩波書店（以下、『古語』と略称）

「外」「端」「口」の対。オキ（沖）と同根。

空間的には、入口から深く入った所で、人に見せず大事にする所をいうのが原義。

時間の意に転ずると、晩（おそ）いこと。また、最後、行く先、将来の意。

おもて[表] 『日国』（「おもて（面）と同語源」）

外部からよく見える部分。公式、正式。家のなかで入口に近い部屋。また、客を迎える部屋。

おもて[面・表] 『古語』 オモ（面）とテ（方向）の複合。「裏」「奥」の対。

ものの正面、社会に対する正式の顔、表面が原義。表の間。客間。

うら[裏・裡] 『日国』

外部からは簡単にうかがうことのできない部分。

家屋の大通りに面していない部分。玄関と反対の側。

うら[心] 『日国』 「裏」「浦」と同語源。

「もの」は外的であるのに対し、「うら」は内面的である。

「うら」は、意識して隠すつもりはなくても表面にはあらわれず隠れている心。

うら[裏・心] 『古語』 平安時代までは「うへ（表面）」の対。院政期以後、次第に「おもて」の対。

表に伴って当然存在する見えない部分。表側と対になる面。反対側。

と[外] 『古語』 「内」「奥」の対。

自分を中心にして、ここまでがウチだとして区切った線の向う。御簾の外。

うち[内] 『古語』 古形ウツ（内）の転。

自分を中心にして、自分に親近な区域として、自分から或る距離のところを心理的に仕切った線の手前。

そこは、人に見せず立ち入らせず、その人が自由に動ける領域。

ウチは、中心となる人の力で包み込んでいいる範囲、という気持が強い。内裏。転じて、天皇。

- (13) 荒木浩校注『続古事談』p.612，新日本古典文学大系4 1，岩波書店，2005 年。

『今鏡』p.41，国史大系第2 1 巻下，吉川弘文館，1965 年 にはつぎのように記される。

「この御門みそちにだにみたせ給はぬ。よのをしみたてまつる事がぎりなかるべし。その御ありさまないしのすけさぬきとかきこえ給し。こまかにかゝれたる文侍りとかや。」

- (14) 丹下暖子 “『讃岐典侍日記』上巻の一側面 — 天皇の代替わりという過渡期をめぐって—”

『詞林』大阪大学古代中世文学研究会，2009 年。

- (15) 小西甚一(1993)『日本文学史』p.82，講談社学術文庫。（初出は 1953 年，弘文堂）

しかし、同(1986)『日本文藝史Ⅲ』p.123，講談社，においては「1 2 世紀末葉の人たちに『讃岐典侍日記』が好評だった理由としては、表儀性と私儀性の調和を挙げることができよう。もともと、中世の「雅」を失ったわれわれ現代人にとって、この日記はむしろ「俗」の面からだけ評価したいはずであり」とされ、現代での評価の一面性を指摘する。

- (16) 宮崎莊平(1996)『女房日記の論理と構造』p.276，笠間書院。

- (17) ドナルド・キーン(1984)『百代の過客 日記にみる日本人（上）』p.99，朝日選書。

- (18) 池田亀鑑(1965)『宮廷女流日記文学』至文堂。（初版は 1927 年）

- (19) 岩佐美代子(1999)『宮廷女流文学読解考 総論 中古編』p.21，笠間書院。

- 山川三千子(2016)『女官 明治宮中出仕の記』講談社学術文庫（初出は 1960 年，実業之日本社）は，権掌侍として出仕した自身の体験から，明治宮中の皇后を中心とした「奥」の日常を活写した稀有な記録であり，本論とは時代が異なるが，同じく崩御の際の記述もある。
- (20) 藤原宗忠『中右記』記録期間は，応徳 4 年(1087)～保延 4 年(1138)『増補資料大成』臨川書店。
崩御の嘉承 2 年 7 月 1 9 日条に，「関白殿走出鬼間障子口」p.230，といった具体的記述がある。
藤原忠実『殿暦』記録期間は，承徳 2 年(1098)～元永元年(1110)『大日本古記録』岩波書店。
記録の詳細さでは『中右記』が優るとされるが，忠実は当時の関白であり『日記』本文にも登場する。
- (21) 加納重文(2008)『平安文学の環境』—後宮・俗信・地理—，p.103，和泉書院。
- (22) 岩佐美代子 前掲書 (18)，p.198。
- (23) 稲賀敬二(1965)“讃岐典侍日記の死と生 —典侍腹の御子たち—”『國文学』，学燈社。
- (24) 小谷野純一(1984)『平安後期女流日記の研究』教育出版センター。
- (25) 石埜敬子(1990)“『讃岐典侍日記』の構成” p.231，女流日記文学講座 第 4 巻
『更級日記・讃岐典侍日記・成尋阿闍梨母集』，勉誠社。
- (26) 小谷野純一(1985)“『讃岐典侍日記』上巻、堀河帝の病床の間をめぐる”，
『國語と國文学』，東京大学国語国文学会。
- (27) 高野祥子(2006)“王朝女流日記文学における「鐘の音」の機能 —作品的特質との関わりをめぐる—”，
『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』No.7。
- (28) 引用書頭注 (p.404)によると，天皇の伏せっている部屋の北に隣接した「塗籠」とする。
- (29) 西村謙司(2009)『臨終の住まいの建築論』中央公論美術出版。
無常院は、世界の無常と人間の死を自覚する場所であると同時に、そこを厭離し、往生極楽の願いを明らかにすべき場所であると解することができる。(p.111)
池見澄隆(1985)『増補改訂版 中世の精神世界 —死と救済—』人文書院。
臨終行儀の機能は看病・看死を中心に死後の葬送とも接続しており、無常院も、看とりから救いへの展望をもった施設なのである。その意味では、この営みは病人の死後往生へのケアであるといえよう。(pp.169-170)
- (30) 玉腰芳夫(1980)『古代日本のすまい 建築的場所の研究』ナカニシヤ出版。
『讃岐典侍日記』によれば、崩御と共に昼間であるにもかかわらず、まず格子を下している。外界から隔離された室（むろ）的形式にすることを意味しよう。『吉事略儀』や『吉事次第』は遺骸が帳内にあればよいが、そうでなければ屏風をその廻りに立てるとする。室性を強めるのである。ただし堀河帝は帳台には臥していないし、『中右記』によれば宗忠が北面より簾ごしに死顔を拝しているので、屏風で囲われているのでもないようである。(p.164)
ここで取り上げている場面は崩後の処置として内大臣が指示したものであり，本稿でいう「表」である。
また，隔離（隔て現象）については，“隔て現象における場所の構造—源氏物語の場合”（日本建築学会論文報告集 1975 年）があり，上掲書終章第一節に入れられている。『源氏物語』という物語文学をテキストとしており，当時の素材として具体的に，簾，屏風，衝立，几帳，壁代，さらに障子，遣戸，妻戸，格子などをあげている。
玉腰はこの論考で，空蟬の「いかに近からむと思ひつるを、されど、けどほかり」と云う情景を取り上げている。
本稿の『讃岐典侍日記』における天皇の亡骸に寄り添う典侍の心象風景との距離はいかばかりであろうか。
- (31) 増田友也(1951)“隔離 — 壁”『日本建築学会研究報告』第 1 6 号
抽象的な見地に立ち、生活空間の一部分が隔離されて建築空間を構成するものとすれば、その空間を構成するものつまり隔離機能をもつものが空間限定者即ち意味においては旧来の壁であると云へる。しかしここで云ふこの壁は単に意味であって必ずしも実存するものではない。
増田は、まず隔離を Seclusion（隔離，引きこもった状態，隠遁，閑居，僻地，人里離れた場所など）として括り，そこから interception（途中で捕えること，横取り，傍受，遮断，さえぎること，遮蔽，妨害など）と，separation（分離，独立，離脱，選別，境界線，隔てるもの，仕切り，間隙，裂け目など）との二様の意味を見出す。
- (32) 篠塚純子(1981)“『讃岐典侍日記』と人生 —御ひざのかげ—”『解釈と鑑賞』，至文堂。

(2020 年 9 月 10 日受理)